

六八

大ネズミの一匹が死に至る病を媒介していた。きみが先ほどの戦闘で一度でも攻撃ラウンドに敗北していたら一一一へ。敗北せずに勝ったら二一八へ。

六九

きみは珠たまを持ち上げて頭の上に掲げると、石の床に叩たたきつける。珠たまは小さな欠片かけらになって砕け散る。紫の煙が立ち昇り、きみを包み込んだ。それはきみの周囲を回り始め、徐々に回転を速めて行く。きみは紫の光の壁に押し込められるが、それを突き抜けることはできない。まるで回る光のチューブの中で窒息するかのようだ。やがてきみの頭上に人の骸骨がいこつが現れる。それは口を開き、まるできみをあざ笑あざわらっているように見える。きみの意識は急に途絶えた。気を失って床に倒れ、二度と目を覚ますことはない。きみの冒険はここで終わる。

七〇

金の鍵をわたすと、ウイルバーはほとんどひったくるように受け取った。彼はきみの手に金貨二十枚を握らせ、新たに手に入れた品をじっくりと見つめながら喜びの声をあげる。ウイルバーは椅子いすに座り、ほかの客が待っているのも忘れて拡大鏡で鍵を子細に検分した。きみは彼を放っておいて次の店に向かうことにする。一一九へ。

